



おじさんズ通信

2022年4月号 (No.17)

発行元：登別市新生町4丁目桃柿通

緑風舎

発行者：おじさんズ3号

語れ！雑誌達よ

帰ってきたキネ旬

戦後の復刊物から昭和60年ころまでに発行された「キネ旬報」約500冊がこの4月、我が家に戻ってきました。

ある事情から6年ほど前に預かることになった映画雑誌の山は、すでに故人となられた室蘭の映画マニアが残したもので、遺族が室蘭シネマクラブに寄託。その後、高校時代の友で映像作家のBIN山本が登別駅前通りに開設した「登別映像機材博物館」の本棚に陳列していましたが、博物館の札幌移転が決まり、急ぎ自宅への一時避難と相成りました。

運び込みとなると、「おじさんズ産業すぐやる課」の出動です。軽自動車に全部積み込み、1回で引っ越し完了。大人4人分相当の重量とあって、デコボコ道では車体が何度かバウンドし、パンクせんか？とひやひやでした。

保管場所はどこにする

透明なブックカバーに包まれたB5サイズのキネ旬すべて並べると長さは5、6メートルにも。とりあえずはツンドクでもよろしい、と保管場所を物色していたら、見つけました。低予算で建てたマイホームの中で、トイレに次いで自慢できる頑丈な建付けの「押し入れ」です。ここだけは、LPレコード200枚置いても、びくともしません。思わず、「大工さん、偉い」とつぶやいていました。

作業をひと休みして、通信3月号に書いた映画「ひまわり」を紹介している号はどれか、公開年を基に探すとありました。昭和45年8月上旬号の「KINEJUN 試写室」に、映画評論家の品田雄吉氏が「大きな運命に息づく男女の愛」と題して「西欧の映画が、現代のソ連の中にカメラを持ち込んで劇映画をつくったのは、おそらくこの作品が初めて」と評していました。

安住の地はいずこに

押し入れにどうにか詰め込んだ500冊ですが、もちろんこのままお蔵入りさせておくつもりはありません。

願わくば、安〜い賃貸の一室を映画好きが集まる砦にして、ローカル色も織り交ぜて、映画文化の歴史

を紡ぐミニ・ミュージアムをつくれぬものかと常々、夢想しているのですが、あと一歩、いや二歩、三歩先かな？

そうこうしていると、お預かりしたキネ旬のすべての所有権を当方に移管しますと、シネ・クラ代表から連絡あり。責任の所在がハッキリすると同時に、その重責もぐんと増しました。



キネ旬の一部と映画ポスター。奥の押し入れに全部ツンドク収納できましたが、安住の地はいずこ。

今の時代、どこの団体も高齢化が進み、後継者不足が頭痛のタネとか。40代、50代の同好の士は「金の卵」として燦然と輝きます。カネは何とかなりそう（「ウソつけ」の声あり）ですが、人財だけは簡単に得られません。

キネ旬の冊子群や映画ポスター、もぎり入場半券などなど、生かすも殺すも、この半年が勝負かもしれません。

「暮しの手帖」も

我が家にもう一種類の雑誌「暮しの手帖」が、ざっと200冊、いやもっとあるようです。

ただし所有者は、ヤマの神さま。30代のころから苫小牧の古本屋や室蘭にあった背文字屋さん、道で出会った廃品回収業者のリヤカーなどからコツコツ収集。第1世紀は数冊を除いて100号まで、第2、第3世紀も合わせると約250冊ほどになります。

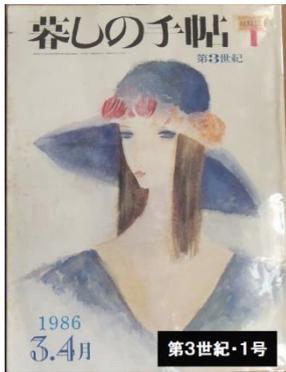
キネ旬もそうですが、カミさんともども、この雑誌の山を前に口にはしているのは「これを理解ある若い人

に、受け継いでもらえれば」との願い。でも、探せば光は差すものです。「暮しの手帖」は、ほぼ行先が見つかり、最近、時間的余裕ができた本人が再読、整理した後に引き渡す予定となりました。

そして、「ぞっき本」とは？

「ぞっき本」なる言葉を御存じでしょうか。

昭和61年2月18日付の朝日新聞コラム「街」に、全国の書店から返却された「暮しの手帖」が2週間に一度、紙業会社で裁断されている、との記事が載っています。初代編集長の花森安治が、返本がぞっき本として流通しないように執り続けた措置とか。だから、古書市場に流れるのは、誰かが購入し手放したものであるということになります。



ぞっき本とは古本市場で極めて安い値段で売られる新品本のことで、ぞっきは「ぞっくり」「すっかり」という意味の業界用語だそうです。

コラムでは裁断に立ち会う社員の苦痛に触れ、最後に「『暮しの手帖』は『二世紀』目の百号を終えて、この三月から『三世紀』目に入る」と結んでいます。そして、今は第五世紀時代。無広告生活情報誌はともタフなのです。

ぱっと明るく、閉店です

家族で毎週1回続けてきた「1Day シェフの店」を、先月31日をもってやめました。「なんで」と聞かれて「青森県の下、岩手県の隣」と、お茶を濁しましたが、正しくは「もう歳だよな。この辺が潮時かも」。新型コロナ騒ぎで、1、2カ月全店休業から再開しては、また休んでの繰り返しがあったのも、多少、影響したかな。

「1Day」の冠通り、最初は週1回2時間ほどの「喫茶」からスタートしましたが、「お客は、ほとんど来ません」のご託宣通り、埋め草的な閑古鳥カフェでした。その後、パンや手作り菓子を出していると、食事の店にしては一の要望があり、カミさんも本格参戦。毎週木曜日、弁当やスイーツを出す店に変身した次第です。

料理の不得手な私の役目といえば割り箸の袋詰めや看板用ポスター作り、スイーツの賞味期限ラベル印刷など、結構、雑用がありました。

あれから7年一。「明るく、ぱっとやめましょう」と閉店に至りましたが、やめると聞いて、最終日は花

束、また花束のプレゼントが続き、店内のカウンターに飾られたバラやカーネーション、ヒマワリなどによって「開店祝い」に逆戻りしたような雰囲気になりました。いつの間にか、営業日の午後から集まり、お茶談義するようになった「木曜会」の皆さまからも、オチャケを贈られ「かたじけない」。

辞去の一句は「惜しまれて辞めるが花」でしょうか。

薫風 烈風

▶おじさんズ通信12号で紹介した、室蘭在住の89歳男性が制作した手作りヨットですが、早ければゴールデンウィーク前にも浮力テストにトライできそうです。現段階で海に運ぶのは、ちょっと無理なので、テスト用プールをご自宅の庭で組み立てての挑戦です。

折から先月26日、海洋冒険家・堀江謙一氏(83)がサンフランシスコから世界最高齢での単独無寄港太平洋横断に出航しました、

幾つになっても夢をあきらめない冒険心は同じ。いずれ室蘭発「あらヨット号」航海記をお届けできればと思っています。

▶YouTubeで若い大学生の東海道五十三次動画を見ていて、彼が発する「かんしょ」なる言葉に首を傾げた。もうひとつの「こうほうだいし」にも「え〜？」

「かんしょ」は関所、「こうほう」は弘法大師のことだったが、笑っちゃいけません。私も、これまで何回、発音を誤ったことか。赤面の思いは数えきれません。

そこで思い浮かぶのが四代目三遊亭圓歌(歌之介)のマクラ。息子の漢字テストの結果が悪いことを嘆く奥さんがご主人に向かって「あなたもあなただわ。熱海のことを『ねっかい』と言ったり、小豆島を『あずきじま』と呼んだり」とチクリ。

当の旦那も負けていません。「漢字が少しぐらい読み書きできなくても、いいじゃないか。じゃあ、お前は『薔薇』という字が書けるか。『葡萄』はどうだ。作っている人だって書けない」とやり返し、「憂鬱の『鬱』はどうだ。俺は、あの字を見ただけでユーウツになる」

高校時代、国語のテストで「作者が言いたかったことは」の設問に「作者じゃないから分かりません」と答案用紙に書いた師匠。皆さんも、こんなユーモア精神を大切に。

▶「おはよう」と庭の片隅で、最初に春のあいさつをしたのは紫色のクロッカスでした。原産地は地中海から小アジアと呼ばれている地域で、花言葉は「青春の喜び」「切望」。ウクライナでの戦闘が1分1秒でも早く、やむことを祈りつつ、皆さん、お元気で〜。